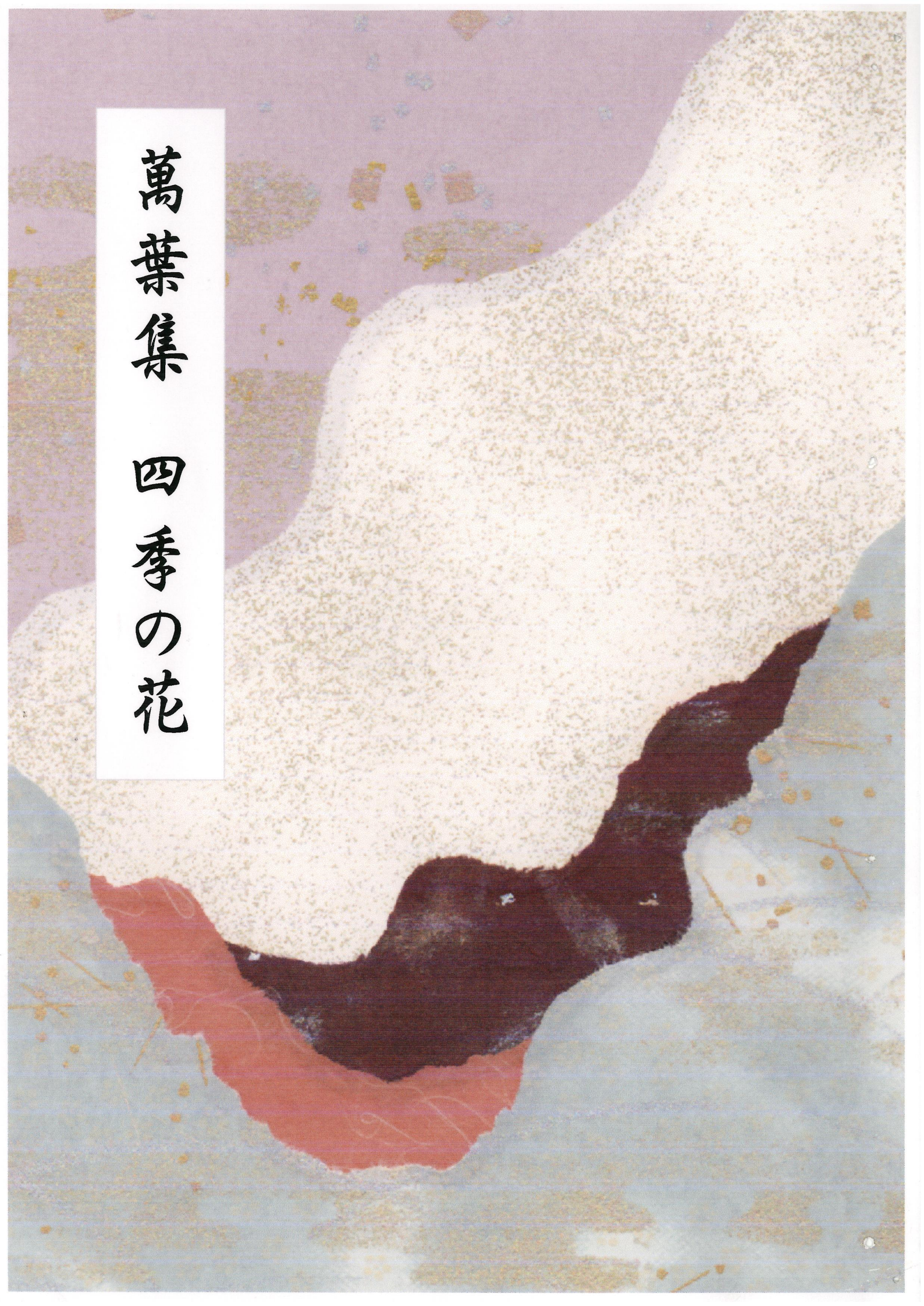




萬葉集 四季の花

ミニコミ誌を作るために今まで撮りためていた花の写真を眺めてみると、萬葉集の歌にもこれらの花々が数多く詠まれていることに気が付きました。

萬葉の時代の人々が目にした花が、今でも世田谷の野や家の庭に咲いていることは、緑の多い世田谷ならではのと思います。藤袴や女郎花も、お庭の写真を撮らせていただいたり、撮った写真を携帯に転送して頂いたりもしました。

とりわけ「わらび」など世田谷で見つかる筈はないと、萬葉集中屈指の美しい歌といわれる志貴皇子のお歌はあきらめていたところ、「わらび」があると教えてくださる方があり、飛び上がって喜びました。やっと芽が出て可愛い写真が撮れました。

萬葉歌碑が、近くにあることも嬉しいことです。いろいろなエピソードと共にこの冊子を作りました。

又私たちが冊子を作っている最中に、元号が平成から萬葉集出典の「令和」となったことも忘れ得ぬ思い出となります。

武蔵國の歌

多摩川にさらす手作り　さらさらに
何ぞこの兒の　ここだ　愛しき

多摩川で手作りの布をさらさらとさらすように、さらにさらにどうしてこの娘がこんなにもいとしいのだろうか。

古代の多摩川付近では手作りの麻布を調(貢物)として納めていた。その布を白くするために、女性たちが多摩川で布をさらしていた。布をさらすが序詞として、次のさらにさらにを引き出している。



萬葉歌碑 (狛江市)



わらび (砵1丁目)

志貴皇子の懽よろこびの御歌一首

石いはそそく垂水の上のさわらびの
萌え出づる春になりけるかも

岩に流れ落ちる水の上のわらびが、芽を出す春になったなあ。

萬葉集中、屈指の歌と言われている。



桃 (大蔵運動公園)

春の苑くれなゐにほふ桃の花

した照る道に出で立つをとめ

大伴宿禰家持

春の園の紅に色づいた桃の花の照り返りが、下の道を照らしている。
その道に(家を)出て立っている娘子よ。

大伴宿禰家持が越中国守として、五年過ごした北陸は雪の多い寒いところである。春の訪れはどんなに待たれることか。
天平勝宝三年八月五日少納言となって帰京する前年の春、妻の坂上大嬢も越中に来ていたようで、喜びにあふれた歌である。



つばな花 (多摩川土手)

大伴田村の家の毛の大嬢・妹坂上大嬢に與ふる歌一首

つばな
茅花ぬく浅茅が原のつばすみれ

いま盛なりわが戀ふらくは

茅花を引き抜く浅茅が原につばすみれが咲いている。そのすみれの花のようにいま盛りだ。私があなたを恋しく思う気持が。

(茅花はチガヤの穂、引き抜いて食べた)



春 菜 (砵3丁目)

明日よりは春菜採まむと標めし野に
昨日も今日も雪はふりつつ

山部宿禰赤人

明日から春菜（ふきのとう）をつもうと標をした野に、昨日も今日も雪が
降りつついている。

（標：木を立て縄を張るなどして場所をきめる）

かはづ鳴く甘南備河にかげ見えて

今か咲くらむ山吹の花

厚見王

河鹿の鳴く甘南備川の水面に影を落として、今頃は咲いているだろうか山吹の花が。

十市皇女薨りましし時、高市皇子尊の作りませる御歌

やまぶきの立ちよそひたる山清水

汲みに行かめど道の知らなく

山吹が美しく咲いている山の中の清水を汲みに行きたいけれど、道がわからない。



山 吹 (砦3丁目)

山吹の花が咲いている野原のつぼすみれは、この春の雨にいま盛りに咲いている。

山吹の咲きたる野べのつぼすみれ

この春の雨に盛なりけり

高田女王

春の野にすみれを摘みに来た私は、野がなつかしくて一夜宿ったことである。

春の野にすみれつみにと来し吾ぞ

野をなつかしみ一夜宿にける

山部宿禰赤人



すみれ (世田谷区立すみれば公園)

大津の皇子薨^{かむあが}りましし後、大來皇女、伊勢の齋宮より
京に上りましし時作りませる御歌

磯の上に生ふるあしびを手折らめど

見すべき君がありといはなくに

岩のほとりに生えているあしびを手折ったけれど、見せたいあなたは、
いるというのではないのに。



あしび (世田谷区立次大夫堀公園)



かたかご (瀬田四丁目旧小坂緑地)

もののふの八十をとめらがくみ亂ふ^{まが}

寺井の上のかたかごの花

右は大伴宿禰家持が越中守の任にありし時作れる歌

大勢のをとめらが、いり乱れて水を汲んでいるお寺の井戸のまわりに、かたかご（かたくり）の花が咲いている。

（もののふ…武士は大勢の集団であることから大勢のをとめらにかかる枕詞）

春が来て大勢のをとめらが、笑いさざめきながら井戸の水を汲んでいる情景が見えるような歌である。



あじさゐ (喜多見 宝珠院)

あぢさゐの八重さくごとく八つ世にを

いませ吾背子見つつしのはむ

あぢさゐ
有の一首は、左大臣の、味狭藍の花に寄せて詠めるなり

あぢさゐ (紫陽花) が幾重にも重なって賑やかに咲くように、貴方はいつまでも栄えていて下さい。私は貴方を見て懐かしく思っています。

道の^{うまさ}べの^{うれ}荊の末にはほ豆の

からまる君をはかれか行かむ

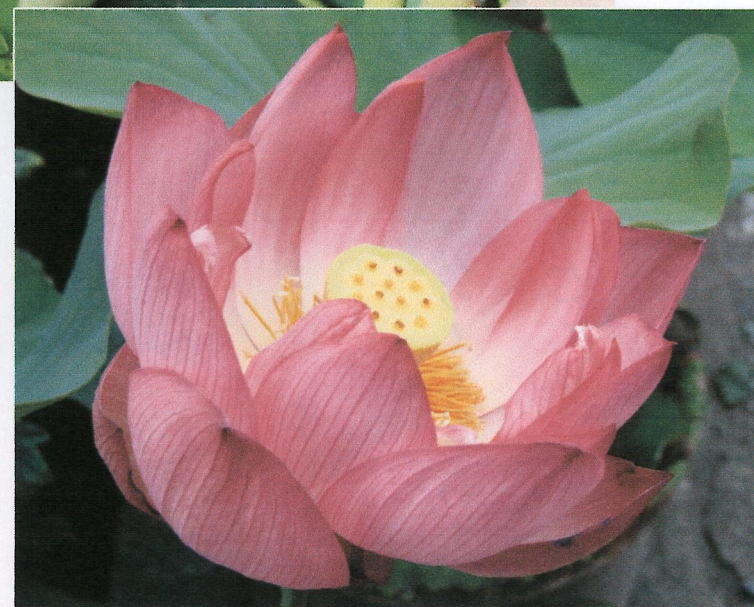
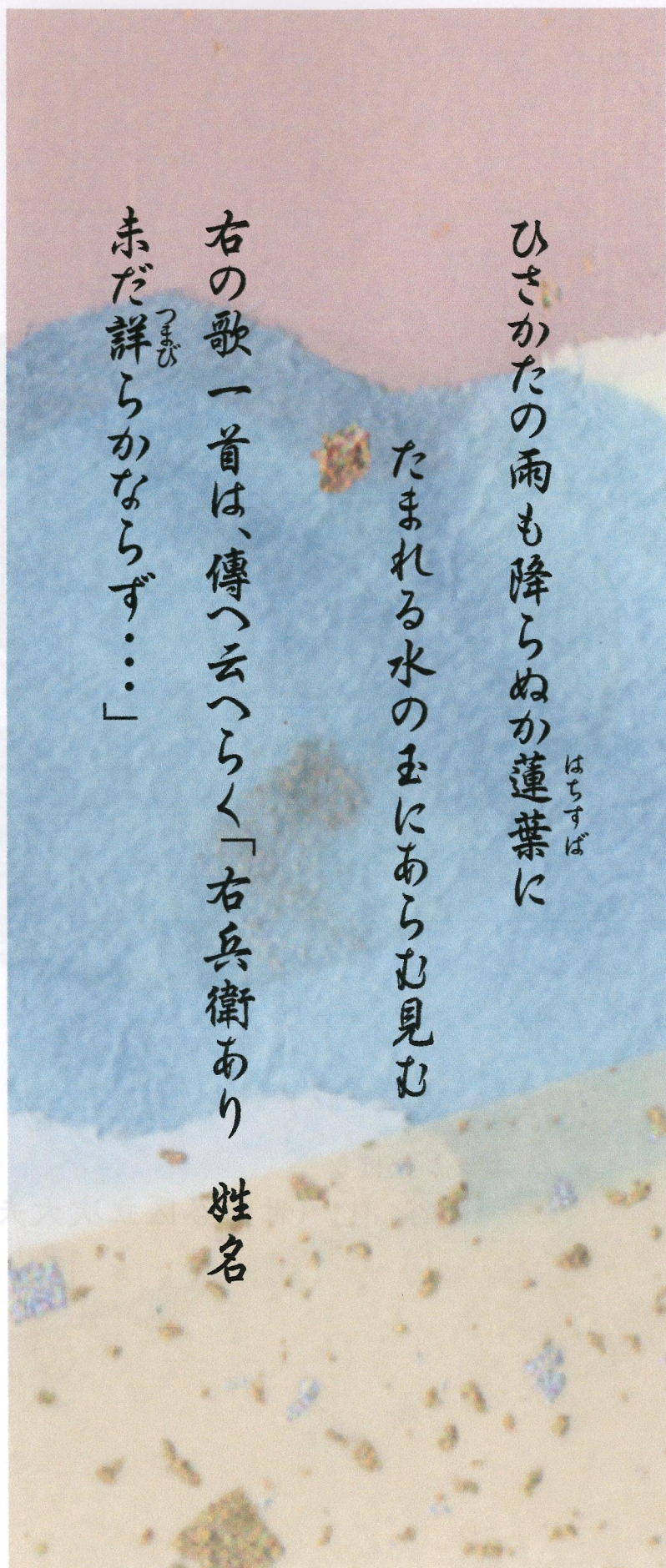
あまはのこほりのかみつよぼろはせつかべのとり
天羽群の上丁丈部鳥

道のほとりの荊（いばら）の枝先にからみつく豆の蔓のように、まどわりつく君を
引き剥がしていくのであろうか。
（防人として九州に赴く人の歌であらうか）



荊（砧8丁目）

雨でも降らないかなあ、蓮葉（はすの葉）に溜まった水が、玉のように見えるのになあ。）



蓮葉（喜多見 知行院）

大伴宿禰家持の坂上大嬢に贈れる歌の反歌

高圓の野邊の容花かほばなおもかげに

見えつつ妹は忘れかねつも

高圓の野原の容花（ひるがお）を見ていると、妻の面影が見えて忘れることは出来ない。



かほばな
容花（世田谷区立次大夫堀公園）

山上憶良、秋の野の花を詠める歌二首

秋の野に咲きたる花を指折りて

かき数ふれば七種の花

萩の花 尾花 葛花 なでしこの花

女郎花 また 藤袴 朝がほの花

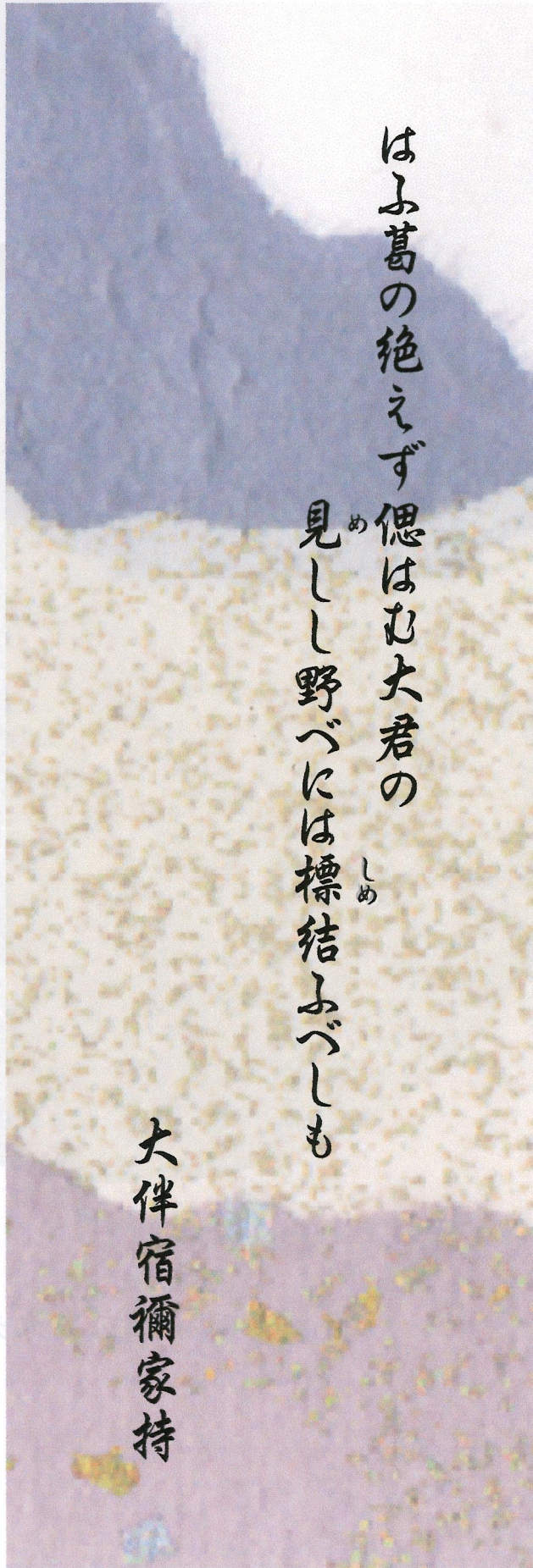
秋の野に咲いている花を、指折り数えてみれば七種類の花がある。

萩の花、尾花（すすき）に葛花、なでしこの花、女郎花それに藤袴、朝がほの花（桔梗）。





葛 (碓緑地)



はふ葛の絶えず偲はむ大君の
見しし野べには標結ふべしも

大伴宿禰家持

葛のつるが延びつづけるように、いつまでも絶えることなく偲ぼうと思う大君が、
ご覧になった野原には、標縄を張るべきだよ(だれも入れないように)。



稲（世田谷区立次大夫堀公園）

磐姫皇后、天皇（仁徳）を思ひて作りませる御歌

秋の田の穂の上に霧らふ朝がすみ

いづへの方にわが戀やまむ

但馬姫皇女の、高市皇子の宮に在りし時に、
穂積皇子を思ひて作りませる御歌

秋の田の穂向のよれる片よりに

君によりこちたな言痛かりとも

秋の田の穂（稲穂）の上にたちこめる朝霧がなかなか晴れないように、私の戀はいつになったら止むのだろうか。

秋の田の実った稲穂が一方になびいているように、君に寄り添いたい。人が何と噂しようとも。

路のべの いちしの花のいちしろく

人皆知りぬわが戀妻は

人麻呂歌集

道端のいちしの花(彼岸花)を誰でも知っているように、人はみな知ってしまった。私の戀妻を。



いちし 〈瀬田四丁目旧小坂緑地〉



萩 (砦 三峰神社)

大友宿禰家持の歌二首

秋の野に咲ける萩萩秋風に

なびける上に秋の露おけり

高圓の野邊の萩萩このころの

あかとき
暁 露に咲きにけむかも

秋の野に咲いている萩萩が風にゆれている。その上に秋の露がおりている。

高圓の野邊の萩萩は、この頃の朝露に咲いたのだろうか。

高圓・・・高圓山(白毫寺)。奈良市の春日山東南に続く山。萩や月の名所

道端の尾花（すすき）の陰の思ひ草（南蛮ギセル）のように、今さらに何を思い迷うことがあるのか。

草に寄する

道の邊の尾花が下の思ひ草^{もと}

今さらになぞ物か思はむ

作者不詳



尾花(岡本静嘉堂緑地)



思ひ草
(砵3丁目)

天平勝寶五年正月十一日同じく二十三日

大伴宿禰家持の作れる歌二首

み苑生の竹の林にうぐひすは

しば鳴きにしを雪はふりつつ

わが屋戸のいささ群竹ふく風の

音のかそけきこの夕かも

御苑の竹の林に鶯はしばしば鳴いたけれども、雪は降りつづいている。

我が家の小さな群竹（竹藪）をふく風の音の、かすかに聞こえるこの夕方である。



竹（岡本静嘉堂緑地）

天平二年正月十三日、帥の老(大伴旅人)の

宅に萃あつまるは、宴會を申ぶるなり。

時に初春の令よき月、氣淑く風和み、

梅は鏡の前の粉を披ひらき、蘭は珮らにの後の

香を薰かほらす。………梅花の歌三十二首の序

左の一首(鶯の聲聞く……)は梅花の歌三十二首のうちの一首



梅(砵3丁目)

鶯の聲聞おとくなへに梅の花

吾家の苑に咲きて散る見ゆ

對馬日高氏老

風交じり雪は降るとも實にならぬ

吾家の梅を花に散らすな

大伴坂上郎女

含ふめりと言ひし梅が枝今朝ふりし

沫雪にあひて咲きぬらむかも

大伴宿禰村上

うぐいすの鳴き声が聞こえている折りしも、我家の庭に梅の花が咲いて散るのが見える。
風にまじって雪が降っても、まだ実になっていない我家の梅を花のままで散らすな。
蕾がふくらんでいると言っていた梅の枝は、今朝ふった淡雪にあって咲いただろうか。



松（大蔵運動公園）

弓削皇子、吉野より^{こけむ}蘿生せる松が^え柯を折り取りて遣しし時、
額田王の奉入れる歌

み吉野の玉松が枝は^は愛しきかも

君が御言を持ちて通はく

磐白の濱松が枝を引き結び

まさきくあらばまたかへり見む

有馬皇子

み吉野の美しい松の枝はいとしいものです。君のおことばを持ちはこんでくることです。

磐白（磐代）の濱松の枝を引き結んで、幸いに無事であつたら、また帰つてきて見ることであらう。

王朝継ぎ紙をスキャナーで取り込み、短冊に見立ててその上にパソコンで歌を書く。
認知症予防のパソコングループの仕事です。

歌の詠み方や送り仮名は

佐々木信綱 編

岩波文庫・新訓万葉集

歌の意味や解説は

佐竹明広 山田英雄 工藤力男 大谷雅夫 山崎福夫 校注

岩波文庫・万葉集

また

犬養孝 監修

扇野聖史 著

福武書店・万葉の道

等を参考にさせていただきました。

「萬葉集四季の花」

ミニコミ誌 Vol.10

令和元年9月13日

制作:認知症予防活動パソコングループ

アミューズPCくちなし

萬葉集 四季の花

